



デイヴィドソニアンから見た分析哲学における自己 知論の展開

著者	小川 祐輔
雑誌名	哲学・思想論叢
巻	36
ページ	112(31)-99(44)
発行年	2018-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153012

デイヴィドソニアンから見た 分析哲学における自己知論の展開⁽¹⁾

小 川 祐 輔

序論

ある主体が、自分が特定の思考、信念、欲求、意図、期待等々（これらを心的状態と呼ぼう）⁽²⁾を抱いていることを誠実な様子で口にしたとする。このとき彼がそのこと（つまり彼の自己知）を客観的な証拠や推論によって正当化しはじめたら、もちろん文脈やことの大きさにもよるが多くの場合、私たちは眉をひそめるだろう。あるいは寸劇でも始まったのかと思うかもしれない。

では自己知というものは概して当てずっぽうなのかということと事情はその反対で、私たちはふつうそこに疑いをさしはさまない。むしろ私たちは、主体が自分の心的状態を一人称現在時制で表明するとき、そこにある種の権威を認めるのである。だが、外的な対象や事態についての報告が客観的な証拠や観察、推論等によって正当化されることを考えると、これは非常に不思議なことに思えてこないだろうか。

一人称の権威（first person authority）とも呼ばれるこの種の権威は、ながらく西洋の哲学者の興味をひいてきた。もちろん筆者が親しんできた分析哲学も例外ではない。むしろそこでは、心的状態にかんする外部主義（externalism）⁽³⁾の登場によって自己知論に興味深いひねりが加えられることになった。外部主義とは、ある種の心的状態は環境的要素や社会的要素といった外的要素との関係のなかでしか個別化できないと考える立場なのだが、これをうけて、一人称の権威の是非や内実があらためて問いなおされることになったのである。

本稿では、このような分析哲学における自己知論の展開を、D. デイヴィドソンの議論（とりわけ、Davidson 1984b; 1987; 1988; 1989）に立脚しながら追ってみたい。デイヴィドソンは外部主義を受け入れたうえで一人称の権威を擁護しようとした一人である。それだけでも十分に興味深いのだが、筆

者が本稿で彼に焦点を当てるのにはもう一つ理由がある。つまり、彼の論文「主観的なものの神話」(Davidson 1988)からの示唆をうけ、上述のような分析哲学における自己知論の展開を、〈心の中の対象との面識(acquaintance)による自己知〉という考え(以下、B. ガートラー(Gertler 2011)にならって「面識説」と呼ぶ)からの脱却過程として描いてみるのは有益だろうと思われたのである。

本稿の構成は以下のとおり。まず1で分析哲学における面識説を概観した後、2でこの面識説が外部主義の登場によっていかなる困難を突きつけられたのかを確認する。3では、デイヴィドソンがどのように外部主義と一人称の権威を調停しようとしているのかについて論じる。そして最後に4で、デイヴィドソンの自己知論の課題を提起してみたい。4の内容について予告的に述べておけば、そこでは自己知と他者の心的状態についての知(他者理解)のあいだにデイヴィドソンが設けている距離にたいして、J. マクダウエルの見解を参照しつつ疑義を呈するつもりである。

1 自己知論としての面識説

面識を哲学の専門的な概念として導入したのはB. ラッセルである。そしてこの面識についての彼の所見を拾っていくと、本稿で検討していく面識説のポイントが浮かびあがってくる。ここでは『哲学入門』(Russell 1912)をとりあげ、彼が面識という概念を導入している一節と、それを自己知のケースに適用している一節を引用しよう(番号は筆者による)。

(1) 推論過程や真理の知識による媒介なしで直接的に気づく(directly aware)あらゆるものにたいして私たちは面識をもつ。このように言うことにしよう(*ibid.*, p. 31 [p. 57] 強調は原著者)。

(2) 内観(introspection)による面識へと考察を広げよう。……私が食べ物を欲するとき、私は自分の食欲に気づくことがある。それゆえ「私が食べ物を欲していること」は面識の対象である。同様に私たちは、快苦をはじめ、一般に自分の心の中で起こる出来事に気づくことがある。この種の面識は自己意識とも呼ばれるが、これは心的なものについてのあらゆる知識の源泉である(*ibid.*, p. 33 [pp. 60-61] 強調は原著者)。

まず(1)を見ると、面識を決定的に特徴づける「直接的な気づき」というキーワードが登場する。ではこの直接的な気づきとはなんだろうか。ガー

トラーは、ラッセルが面識対象の典型だと彼が考えるセンスデータを不可疑としている箇所 (*ibid.*, p. 32) に注目を促す。

たとえば視知覚の場合、ある対象の現れ (appearance) が主体に生じていたとしても、その対象が本当にそこにあるのかどうかを疑うことができる。そしてこのような可能性は、その現れを引き起こした因果的な媒介過程が(錯覚や幻覚の場合のように) 逸脱的である可能性に存していると考えられる⁽⁴⁾。C. ヒルが言うように、ここには「現れ／実在の区別」(Hill 1991, p. 127) がつけられるのである。

しかしこのとき、そのような現れが生じているということは疑いえないように思われる。主体が現れに気づくとき、その現れとそれへの気づきとのあいだになにかしらの媒介過程があるとは考えがたい。むしろこの場合、当の現れ自体が主体の気づきの構成要素となることで現れ／実在の区別が消失している、とでも言うべきだろう。

以上のような議論をふまえてガートラーは、ラッセルのセンスデータをこのような現れを対象化したもの——「視覚的イメージ」のような、主体の意識的な心の中に現れる「心的対象」——と捉え、それへの無媒介的で不可疑的なアクセスこそが直接的な気づき (面識) なのだと解釈するのである (Gertler 2011, pp. 88-90)⁽⁵⁾。

次に (2) では、このような面識が主体自身の心の中で起こる出来事を一般に対象とすることが指摘されている。ラッセルも欲求に言及しているように、ここでいわれている「心の中で起こる出来事」には筆者が本稿冒頭で挙げたタイプの心的諸状態も含まれると考えられる。

面識やその対象を以上のように理解するなら、心的状態は主体の心の中にある対象とみなされ、また自己知や内観の方も、主体のみがなしうる特別な仕方ですその心的対象にアクセスすることとみなされる。これこそが自己知論としての面識説にほかならない。言うなればこの面識説は、「内観」という言葉を文字どおりにとり、〈心的対象への私秘的で特権的なアクセス〉という考えを発展させることで、一人称の権威の不思議を説明するわけである。

さて、面識説のポイントがつかめたところで現代の面識説についても簡単にふれておこう。本稿では自己知論としての側面を強調してきたが、もともと面識説は認識論的関心と密接に結びついて発展してきた考えである⁽⁶⁾。この事情は現代の分析哲学でもおおむね同様で、そこでは内在主義的基礎づけ主義という認識論的路線をとる哲学者に、面識説への強いシンパシーをみてとることができる (cf. Chisolm 1966, chap. 3; Bonjour 2003b)⁽⁷⁾。

内在主義的基礎づけ主義とは、R. パンジョーの言葉を借りれば、「認識的正当化は、信念主体の心の中に内在し、（原理的には）意識的に反省するだけでアクセスできるような要素に依拠するものでなければならない」という内在主義と、「正当化は、究極的には、他の信念の正当化にいっさい依拠することなく正当化されている「基礎信念」に端を発する」という基礎づけ主義が組み合わさったものである（BonJour 2003a, p. 7 [p. 5]）。そしてこの路線での探究を動機づけているものこそ、面識説の核となる考え——「人は自分自身の心的状態（のいくつか）に形而上学的に直接的な仕方でもアクセスでき、そしてこのアクセスが自分自身の心的状態にかんする強く正当化された非推論的判断を可能にする」（Gertler 2011, p. 94）という考え——なのである。

2 外部主義の登場と面識説の困難

しかし序論でも述べたように、面識説は外部主義の登場によって深刻な困難を突きつけられることになった。本章ではそのあたりの事情を詳しく見ていこう。

まず外部主義についてだが、これを論じるなら T. バージの名前は外せない。彼の論文「個体主義と心的なもの」（Burge 1979）は外部主義の古典の一つである。この論文での彼の議論は豊富な思考実験をとおして展開されるのだが、ここではそのうちの一つだけをとりあげることにする。

私たちの言語共同体に属するある主体が、前々から関節炎を患っていた膝のみならず腿にも痛みを覚え、医者に「関節炎が腿にまで広がってるんじゃないかと思うんですけど…」と訴えたとしよう。私たちの共同体では「関節炎」という言葉は腿の炎症には適用されないが、彼はそのことを知らないのである。バージによれば、このときこの主体には〈関節炎が腿にまで広がっている〉という間違った信念が帰されることになる。

では、ここで次のような反事実的状況も想像してみよう。つまり、その主体自身は物理的にも現象的にも元の状況における彼とまったく同じなのだが、彼が属する反事実的共同体では「関節炎」という言葉がリウマチ性の病気一般に適用されているのである。やはりここでも、彼は医者に「関節炎が腿にまで広がってるんじゃないかと思うんですけど…」と訴える。それゆえ、ここでの彼の信念もまた元の状況におけるものとまったく同じだと考えたくなるかもしれない。

しかしバージはそれを否定する。「関節炎」という言葉がかなり異なる用法をもつこの反事実的状況において、この主体に現実の私たちのものと同じ

関節炎の概念を獲得する術があったとは考えがたい。むしろ彼に獲得できた疾患の概念は、その反事実的共同体での「関節炎」という言葉の用法に則したもの（「関節炎_{CF}」と表記しよう）であるはずだ。そしてそれゆえ、このとき彼には〈関節炎_{CF}が腿にまで広がっている〉という正しい信念が帰されるべきだろう——バージはこう論じるのである（*ibid.*, pp. 104-106）。

また、もし以上の思考実験がいくらか人工的に感じられるなら、L. ウィトゲンシュタインによる次の指摘を見てみるのがいいだろう。

期待はそれが生じる状況に埋め込まれている。爆発への期待が生じうるのは、たとえば、爆発が期待されるのが自然であるような（zu erwarten ist）状況からである（Wittgenstein 1953, § 581, 強調は原著者）。

たとえば実験室である物質の爆発実験をおこなっているとき、チームの仲間が誠実かつ期待した様子で「これが爆発したらどんな感じだろう…」と呟いたとしても、なんらおかしいところはない。ではそれとまったく同じ呟きだが、実験の終わった後、爆発などとは無縁の平和な市街地でなされたとしたらどうだろうか。そのようなことはめったにない（というかあってはならない）し、万が一あったとしたら、おそらく私たちは狂気を感じてゾットするだろう。このように、期待という心的状態は周囲の状況との（規範的とさえ言えるような）関係のなかで成立しているのであり、状況の側のみが変化しただけであってもしばしばその内容が一変してしまうのである⁽⁸⁾。

議論の仕方や着眼点はいくらか異なるものの、二人の議論はいずれも、主体に内在する性質や状態のみならず、外的要因との関係をも参照しなければ個別化できないような心的状態が存在することを鋭く指摘している。そしてこれが心的状態についての外部主義の考えである。上ではバージ、ウィトゲンシュタインともに一例ずつしかとりあげなかったが、外部主義的に理解されるべき心的状態がどれだけ多岐にわたるかは、彼らの議論を私たちの側で敷衍してみれば容易に明らかになるだろう。

さて、本章の主題はこのような外部主義が面識説にいかなる困難を突きつけたのかである。とはいえ、この点はすでにデイヴィドソンが端的に表現してくれている。

外的な事実が心的状態の個別化に関与するという発見が私の描いてきた心についての描像〔面識説〕にとっていかに不都合かは、容易に見てと

れる。それは次のような理由による。もしある心的状態に置かれるというのが、心が「面識の」対象〔としての心的状態〕となにかしらの関係に立つことなのだとしたら、そしてもし心というものは自分が置かれた状態を知っていて当然なのだとしたら、その対象がどんなものかを規定する助けとなるものがなんであれ、「心は」それも同様に把握していなければならないのである。これはとりわけ、外的な対象が心の面前にある対象の「構成要素」であるような場合には顕著である (Davidson 1987, p. 35 [p. 64])。

面識説論者は、自己知を心的対象への内的な認知的アクセスとみなしたうえで、この種のアクセスの私秘性や特権性によって一人称の権威を説明しようとするのだった。だがこのような見方を維持するかがり、心的状態の多くは外的要素との関係のなかでしか個別化できないという外部主義の考えは、そのような心的対象には（じつは）特権的アクセスの射程外にある外的要素が構成要素として含まれていたのだ、ということの意味するものに思えてくるだろう。かくして面識説をとおして見られた外部主義は、〈心的対象への私秘的で特権的なアクセス〉という考えと激しく対立することになるのである。

外部主義の登場以降、デイヴィドソン以外にも複数の論者が同様の面識説批判を展開し、特権的アクセスという考えは大きなダメージを受けた (cf. McKinsey 1991; 1994; 2002; Brown 1995; Boghossian 1997)。またそれにともない、一人称の権威自体の危機を示唆する声も聞こえてくることとなった (cf. Woodfield 1982)。しかしデイヴィドソンは、特権的アクセスという考えへの攻撃には共鳴するものの、一人称の権威を放棄しようとはしない。では、彼はどうやって外部主義と一人称の権威を調停しようというのだろうか。章を改めて検討しよう。

3 デイヴィドソンの調停策

デイヴィドソンは、「心に現前する対象というメタファーを除去」 (Davidson 1987, p. 37 [p. 65]) してしまえば話は簡単だと言う。上述の困難は面識というモデルを前提するがゆえに生じたのだから、そのモデルをとっぱらってしまえばいい、というわけである。

私秘的な心的対象なしで一人称の権威を説明しようとする彼の試みの独創性は、面識説論者とは決定的に異なる方向に視点を定めたところにある。つ

まり彼は、認識論の基礎となりうるものを主体が一人探し求めている場面——面識説はここで生まれ、発展したのだった——ではなく、二人（以上）の主体がコミュニケーションをとっている場面に注目したのである。

さて、デイヴィドソンによれば、話し手と聞き手のあいだでコミュニケーションが成立するためには、両者ともに次の二点を推定してかからなければならないという。それは、(a) 話し手が特定の文を誠実に（つまり自分がコミットするものとして）発話したということと、(b) 話し手にはその文の意味することが分かっているということである。すると (a) と (b) がともに満たされている場面では、話し手は、自分の心的状態の表明としてその文を発話している（それゆえ自己知をもっている）ことになるだろう。

だがこのとき、聞き手が話し手を理解できているとはかぎらない。というのは、(a) と (b) の連言は、聞き手が話し手の言葉が意味すること（およびそこで表明されている心的状態）を理解できていない可能性になら制限を設けないからだ。加えてこの推定のもとでは、聞き手が話し手を理解できていないと感じたときには（話し手は自己知をもっているはずなので）聞き手の側が証拠や推論に訴えることになるだろう。

このように上の二つの推定からは、〈証拠や推論なしに自己知を表明する話し手と、適宜証拠や推論に訴えねばならない聞き手〉という非対称性、つまり一人称の権威の存在が帰結するように思われる。これがデイヴィドソンによる説明の骨子である（Davidson 1984b, p. 12; 1989, p. 66）。

すると問題はこれらの推定の正当性だろう。コミュニケーションの成立という観点からすれば (a) は問題なさそうだが、(b) はやはり説明を要する。それこそ外部主義が教えるところでは、話し手の心的状態は聞き手からも等しくアクセス可能な外的要素に依拠するかたちで個別化されるのではなかったか。そんななかで、「話し手の言葉が意味することにかんして間違っていないのは話し手本人であって解釈者ではない、という推定がなければならないのはなぜ」（Davidson 1984b, p. 12 [p. 30]）なのだろうか。

この点にかんしてデイヴィドソンは、いわばリマインダーとして、かなりラディカルなコミュニケーションの場面を描いてみせる。

〔話し手と聞き手のあいだの〕違いを正しく見てとる最良の方法は、異なる言語を話す二人が、おたがいの言語を知らないまま二人だけでコミュニケーションをとる状況を想像することである。……〔この状況で〕話し手にできる最良のことは解釈可能な状態になることだ。つまり、有

限の識別可能な音声を、聞き手にもはっきり分かると思われる対象や状況に首尾一貫した仕方で（consistently）適用するのである。明らかに、話し手はときどきこの企てに失敗するかもしれない。その場合、お望みなら、話し手は自分の言葉が意味することを知らないのだといってもいい。しかし同様に明らかなのは、解釈者は出来事の進展（そこにはもちろん話し手と解釈者の行為の進展も含まれる）に合わせて話し手が提示する音声パターンだけでどうにかやっていかねばならない、ということである。この状況で、話し手は全般的に事実誤認に陥っているのだろうかと思い悩んでも意味がない。彼の振舞いが端的に解釈不可能である可能性もある。しかし彼の振舞いが解釈可能であるかぎり、彼の言葉が意味することは（全般的に）彼がその言葉で意味しようとしていることである。話し手が話している「言語」には他に聞き手がいないのだから、彼が自分の言語を誤用しているという考えはこの状況には当てはまらない。解釈の本性に組みこまれた不可避の推定として、話し手はふつう自分の言葉が意味することを知っているものとみなされる。それゆえ次のような推定が存在することになる。つまり、もし彼が自分は自分の発話した文が真だと思っているということを知っているなら、彼は自分が信じていることを知っている、という推定である（*ibid.*, pp. 13-14 [pp. 32-33] 強調は原著者）⁽⁹⁾。

ここでの話し手の目的は、ひとえに聞き手に理解してもらうことである。そしてそのためには、周囲の状況に合わせて自分が理解する言葉を自分が理解するとおりに使ってみせるしかない。このとき彼が十分な程度の首尾一貫性を示すことができたなら、聞き手は彼を理解する端緒がつかめるだろう。実際に聞き手が理解してくれるかどうかは複合的な問題だろうが、とにかく話し手は自分の言葉がなにを意味するのかについて思い悩むべき立場にはない。

一方の聞き手の目的は、もちろん話し手を理解することである。このとき彼は、話し手に話し手自身の言葉にたいする誤解や無理解を帰すことにたいして慎重にならなければならない。あまりに多くの誤解や無理解を帰しまうとそれだけ話し手の言動は意味不明なものになり、彼の理解可能性が損なわれてしまう。だが、それではコミュニケーションという営みの眼目が失われたに等しいだろう。それゆえ聞き手は、話し手の言動が十分に首尾一貫しているかぎり、話し手は（大筋で）自分の理解するとおりに正しく言葉を使っ

ているのだと考えねばならない。(こうした原則は善意の原則 (principle of charity) と呼ぶことができる。)

それゆえコミュニケーションを成立させるためには、話し手も聞き手も (a) のみならず (b) を——それゆえ一人称の權威の存在を——推定することが必要になる。もちろん上述のもののほどラディカルな事例は現実にはほとんど生じないだろうが、そこから得られる教訓は日常的なコミュニケーションにも当てはまると考えられる。自分を理解してもらおうと誠実に首尾一貫した言動をとる話し手と、そんな話し手を理解しようと努める善意の聞き手がいる場面でのみコミュニケーションは成立し、そこでは必然的に一人称の權威を認めるような実践が営まれることになる——この基本構造こそ、デイヴィドソンが思い出させようとしているものだろう。

いまや明らかなかもしれないが、こうして正当化される一人称の權威は外部主義と対立しない。それどころか、それを前提してさえいる。というのは、話し手が聞き手に首尾一貫した言動を示すためには、自分の言動を周囲の対象や状況と適切に関係づけることが不可欠だからである。ごく私秘的な技能である特権的アクセス (なるもの) を廃し、コミュニケーションという社会的営みの構造に一人称の權威の源泉を求めたことで、デイヴィドソンは外部主義と一人称の權威を調停する方策を示してみせた。いや、「調停」という言葉はおおげさかもしれない。彼が示そうとしているのはむしろ、「一人称の權威、言語の社会的性格、そして思考や意味を規定する外的要因の三者は、主観的なものの神話——思考には心的対象が必要だという考え——をひとたび放棄してしまえば自然と調和する」(Davidson 1987, p. 38 [p. 68]) ということなのである。

4 デイヴィドソンの自己知論の課題

以上三章にわたり、面識説から外部主義の登場を経てデイヴィドソンの自己知論へといたる過程を描いてみた。そしてその全体を導いていたのは、自己知に備わる一人称の權威をどう説明・正当化するのかという問題だった。この点もふまえつつまとめるなら、デイヴィドソンから見た分析哲学における自己知論の展開過程は、〈内的な認知的アクセスの信頼性に裏づけられるものとしての自己知〉論から〈コミュニケーションの場面で要請され、その成立によって裏づけられるものとしての自己知〉論への相当にラディカルな転回の過程だったのだと言えるだろう。

筆者はこの転回を好意的に見ている。面識説が直面する問題を回避できた

り、外部主義の考えを尊重できたりするという理論的な利点もさることながら、〈誠実で首尾一貫した話し手と善意の聞き手とのやりとり〉というデイヴィッドソンの描くコミュニケーション像は、コミュニケーションという営みの（少なくとも一つの）本質を非常に的確に捉えていると思われるのである。そしてもしこの評価が正しければ、そうした的確なコミュニケーション像と結びついた自己知論もまた、より詳細に検討・展開してみるに値するものだということになるだろう。

とはいえ、筆者は自己知にまつわる彼の考えのすべてに満足しているわけではない。そこで本章では、筆者が彼の残した課題だと考えるものを一つだけ指摘しよう。

筆者の考える課題は、自己知の問題とは切っても切り離せない隣接領域、つまり他者理解の問題に関わるものである。デイヴィッドソンは、自己知に特殊な権威が備わることを強調する一方で、他者理解についてはそのすべてを証拠や推論によって媒介されるものと考えている節がある（cf. Davidson 1973, pp. 125-126; 1984b, p. 12）。そう考える彼のポイントの一つは他者理解につきものの間違いの可能性を強調することであり、それ自体はもっともである。だがその考えが次のように表現されるとき、筆者にはそこに深刻な問題が潜んでいるように思えてならない。

私の言葉が意味することについてのあなたの知識は、証拠や推論に基づくかねばならない。あなたはおそらく自分が正しいと思っているだろうし、おそらく実際に正しいだろう。にもかかわらず、それは一つの仮説なのである（Davidson 1989, p. 66 [p. 115] 強調は筆者）。

気になるのは（強調を付したように）「仮説」という言葉である。もし他者理解を言動等の証拠に基づく推論によって仮説を形成することと考えるなら、他者理解には間違いの可能性があるとごく当たり前の事実が、仮説の過少決定（underdetermination）や阻却可能性（defeasibility）といった問題と結びつくことになる。するとその結果、マクダウェルが警鐘を鳴らし続けてきたように、他者の心的状態はせいぜい暫定的に推測できるにすぎないという懐疑的な他者理解観に行き着いてしまうのである（cf. McDowell 1982; 1987）。

とはいえ、デイヴィッドソンは他者の心的状態についての懐疑論者ではない。彼としてはこう言いたいところだろう。まがりなりにも自分とコミュニケー

ションがとれているようにみえる他者を前にして、実は彼は自分の想像も及ばないような心的状態にあるかもしれないなどと考えるのはナンセンスだ。彼を思考する主体として理解できるということは、彼がものの見方や考え方の多くを自分と共有しているということに他ならない。それゆえ、たとえ一つ一つの他者理解は仮説の域を出ないとしても、コミュニケーションが全体としてとどこおりなく進行しているかぎり、その大部分は正しいと正当に確信できるのだ、と (cf. Davidson 1973; 1974; 1983; 1992)。

たしかにこれは、他者理解の可能性を根底から疑問視するような全面的懷疑論への反論としては興味深い。しかし、このデイヴィッドソンの考えを〈他者理解は全体としておおむね正しいと推定できる仮説群としてしか他者に届いていない〉と述べなおしてみると、それが日常的な感覚を救うものではないことがはっきりするだろう。それゆえ、筆者には彼の応答が他者理解の可能性を適切に擁護するものとは思えない。

なじみの言語を使う他者の発話や文章がきわめてスムーズに理解できるとき、そこで起きていることを仮説形成とみなさねばならない理由とはなんだろうか。コミュニケーションにおいて話し手と聞き手のあいだには基本的な非対称性があると(筆者からみれば正しく)考えるからといって、そこからただちに他者理解はすべて仮説形成だということが導かれるわけではないだろう。たとえば、自己知はふつう自分がアウトプットするものの観察にさえ基づかないという点を尊重しつつ、そういうスムーズな他者理解の場面では知覚にも似た非推論的な認知によって他者の心的状態そのものを「聞いたり見たり」(McDowell 1987, p. 99)できている、という(表現こそ比喩的だが)日常的な感覚に適う考えを展開する余地もある。そうすれば他者理解を仮説形成とみなす必要もないはずだが、それを妨げるなにかがデイヴィッドソンのコミュニケーション観にはあるのだろうか。

この点を解明しつつ他者理解の可能性をより健全な仕方で擁護すること、そしてそのなかであらためて話し手と聞き手のあいだの非対称性や一人称の権威が問題になる程度を見定めてみる——自己知論に携わるデイヴィッドソニアンの課題として筆者が提起してみたいのは、まさにこれらのことである。

結論

本稿では、〈一人称の権威と外部主義は両立するのか〉という問題意識のもと、面識説からデイヴィッドソンへいたる分析哲学における自己知論の展

開を追ってきた。そのなかで明らかになったのは（そしてここでもう一度繰り返しておきたいのは）次の二点。すなわち、面識というモデルで自己知を理解しようとするかぎり、一人称の権威と外部主義は激しく対立するということと、両者を調停しようとするデイヴィドソンの試みの独創性は、自己知や一人称の権威の基盤として、個人の心の中ではなくコミュニケーション——とりわけ、そこでの話し手と聞き手の役割の違い——に注目したところにあるということである。

たしかに、4でもそのうちの一つを指摘したように、デイヴィドソンの自己知論には洗練や検討の余地が少なからず残っていると言えるだろう。しかし、それをふまえて彼の示した〈内観からコミュニケーションへ〉という方向性をさらに深めていけば、自己知や一人称の権威について興味深い知見が得られるのではないか——筆者はこう考えている。この見立てに堪してはまだまだ語るべきことがあるが、本稿で行ったサーヴェイランスがそれにいくらかでも説得力をもたせるものであったことを願いつつ、一旦ここで筆を置きたい。

参考文献

- Boghossian, Paul, 1997, “What the Externalist Can Know A Priori”, in *Proceedings of Aristotelian Society*, vol. 97, pp. 161-175.
- BonJour, Laurence, 2003a, “The Regress Problem and Foundationalism”, in BonJour & Sosa, 2003, pp. 5-23.
- , 2003b, “Back to Foundationalism”, in BonJour & Sosa, 2003, pp. 42-59.
- BonJour, Laurence & Sosa, Ernest, 2003, *Epistemic Justification*, Blackwell Publishing.〔上枝美典訳、2006『認識論の正当化』産業図書。〕
- Brown, Jessica, 1995, “The Incompatibility of Anti-Individualism and Privileged Access”, in *Analysis*, vol. 55, pp. 149-156.
- Burge, Tylor, 1979, “Individualism and the Mental”, in Burge, 2007, *Foundations of Mind*, pp. 100-150, Oxford University Press.〔前田高弘訳、2004「個体主義と心的なもの」『シリーズ心の哲学Ⅲ 翻訳篇』所収、勁草書房, pp. 163-274.〕
- Chisholm, Roderick, 1966, *Theory of Knowledge* (3rd), Prentice Hall.〔上枝美典訳、2003『知識の理論』世界思想社。〕
- Davidson, Donald, 1973, “Radical Interpretation”, in Davidson 1984a, pp. 125-139.

- , 1974, “On the Very Idea of a Conceptual Scheme”, in Davidson 1984a, pp. 183-198.
- , 1983, “A Coherence Theory of Truth and Knowledge”, in Davidson 2001, pp. 137-153.
- , 1984a(2001), *Inquiries into Truth and Interpretation* (2nd), Oxford University Press.〔野本和幸他訳, 1991『真理と解釈』勁草書房.〕
- , 1984b, “First Person Authority”, in Davidson 2001, pp. 3-14.
- , 1987, “Knowing One’s Own Mind”, in Davidson 2001, pp. 15-38.
- , 1988, “The Myth of the Subjective”, in Davidson 2001, pp. 39-52.
- , 1989, “What is Present to the Mind”, in Davidson 2001, pp. 51-67.
- , 1992, “The Second Person”, in Davidson 2001, pp. 107-121.
- , 2001, *Subjective, Intersubjective, Objective*, Clarendon Press.〔清塚邦彦他訳, 2007『主観的、間主観的、客観的』春秋社.〕
- Gertler, Brie, 2003(2015), “Self-Knowledge” (revised), Stanford Encyclopedia of Philosophy, <https://plato.stanford.edu/entries/self-knowledge/> (2017年3月1日閲覧.)
- , 2011, *Self-Knowledge*, Routledge.
- Hill, Christopher, 1991, *Sensations*, Cambridge University Press.
- McDowell, John, 1982, “Criteria, Defeasibility, and Knowledge”, in McDowell 1998, pp. 369-394.
- , 1987, “In Defence of Modesty”, in McDowell 1998, pp. 87-107.
- , 1998, *Meaning, Knowledge, and Reality*, Harvard University Press.
- McKinsey, Michael, 1991, “Anti-Individualism and Privileged Access”, in *Analysis*, vol. 51, pp. 9-16.
- , 1994, “Accepting the Consequences of Anti-Individualism”, in *Analysis*, vol. 54, pp. 124-128.
- , 2002, “Forms of Externalism and Privileged Access”, in *Philosophical Perspectives*, vol. 16, pp. 199-224.
- Russell, Bertrand, 1912(1999), *The Problems of Philosophy* (rpt.), Dover Publications.〔高村夏樹訳, 2005『哲学入門』ちくま学芸文庫.〕
- Wittgenstein, Ludwig, 1953(2009), *Philosophical Investigations* (4th), Wiley-Blackwell.〔藤本隆訳, 1976『ウィトゲンシュタイン全集 8』大修館書店.〕
- Woodfield, Andrew, 1982, “Foreword”, in Woodfield (ed.), *Thought and Object*, pp. v-xi.

鬼界彰夫, 2003『ウィトゲンシュタインはこう考えた』講談社現代新書.

高村夏輝, 2005「訳者解説」『哲学入門』所収, pp. 246-279.

引用した英文・独文はすべて筆者の責任で訳したが、邦訳を併記したものにかんしてはそれを参考にさせていただいた。

注

(1) 本稿は、2017年3月に信州大学で開催された「知覚の比較哲学」ワークショップでの発表原稿を加筆・修正したものである。参加者の皆様、とりわけ、お招きいただいた護山真也先生、当日会場でご指摘をくださった三谷尚澄先生と藤川直也先生に感謝いたします。

(2) このように、本稿では命題的態度(propositional attitude)と呼ばれる心的状態のみを考察の対象とする。もちろん心的状態はそれ以外にもあり、とりわけ痛みに代表される感覚は自己知の問題にとって非常に重要だと考えられるが、命題的態度の場合とは事情が異なることが予想されるため本稿では立ち入らない。この姿勢はデイヴィドソンにも共通するものである(cf. Davidson 1984b, p. 3)。

(3) あるいは意味論的外部主義とも呼ばれる。「外部主義」の名を冠する立場は他にもいくつかあるが、本稿で言及するのはこの種のもののみである。

(4) ここでは視知覚を例にとって説明したが、もちろん推論のような認識的な媒介過程についても同様のことが当てはまる。

(5) もっとも、このようなガートラーの解釈はラッセル解釈としては間違っているのかもしれない。たとえば高村夏輝(高村 2005)によれば、ラッセルの考えるセンスデータは心的対象ではないのだという。しかし、自己知論としての面識説はガートラーに見られるラッセル観と密接に結びついていると考えられるため、本稿では彼女の解釈に基づいて話を進めていく。(それゆえ、本稿はラッセル自身への論評は意図しないものとする。)

(6) この点にかんしては、ガートラーとラッセルが面識説ないし面識の概念の源泉としてR. デカルトに言及しているのが示唆的だろう(Gertler 2011, p. 20; Russell 1912, p. 10)。また、面識説と内在主義的基礎づけ主義との関係を指摘したものとして、Gertler 2003も参照。

(7) ただし、現代の面識説論者の見解はかならずしも上述のとおりではないし、一枚岩でもない。ガートラーが指摘するように、(I)彼らは(センスデータのような)心的対象の存在にコミットしない傾向にある。また、(II)特権的なアクセスが可能な範囲(感覚のようなもの)にかぎられるのか、本稿で問題にしている命題的態度も含むのか)について、彼らのあいだにも見解の相違が見られる。最後に、(III)彼らの多くは面識が完全に不可疑ないし確実だとは言わない。言い換えるなら、彼らの多くが面識に認めるのはもう少し弱い認識論的安全性のみである(Gertler 2011, pp. 94-97)。

(8) このウィトゲンシュタイン解釈、とくに状況と狂気の関係という論点は、講義のなかで鬼界彰夫に教わったものである。類似の論点を扱ったものとして、鬼界 2003, pp. 328-336も参照。ただし、この論点を分析哲学における外部主義に接続した責任は筆者にある。

(9) この一節からも明らかかとおり、デイヴィドソンは自己知が不可謬だとは考えていない。彼が擁護しようとしているのは、自己知は(証拠や推論に基づいていなくとも)大部分において信頼できるという考えである。

(おがわ・ゆうすけ 筑波大学大学院一貫制博士課程
人文社会科学研究所哲学・思想専攻)